
ネギま！太陽の戦士

葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！太陽の戦士

【Nコード】

N0215Y

【作者名】

葉月

【あらすじ】

一 神奈川県川崎市で繰り広げられる壮絶な善と悪の戦いー
天体戦士サンレッドと、悪の組織フロシャイム川崎支部ヴァンプ将軍。

幾たびの激闘により築かれた、友好的な敵対関係（ヴァンプ談）
そんな二人が、バイクでツーリング中に謎の発光現象が！
二人が目覚めるとそこは神奈川県川崎市ではなく埼玉県麻帆良市
！？

常に全力を出すことが出来なかったヒーローは、己が力を存分に振るい、白き翼を照らす太陽となる！

天体戦士サンレッドと魔法先生ネギま！のクロスオーバーです。

苦手な方はお気をつけください。

処女作ですので拙く、誤字脱字も多いと思いますが、よろしければ見てやってくださいませ。

プロローグ（前書き）

初めまして！

皆さんの小説読んで触発されて、勢いのまま書いた駄文。処女作品ですので至らないことが多々あると思います。

それでも駄文なりにがんばっていきたいとおもいます！

よろしく願います！

プロローグ

神奈川県川崎市のとあるマンション

ピーンポーン・・・

「おーい、かよ子ー？誰か来たぞー？」

リビングで寝転がってテレビを見ている男性は動こうとはしない。

「はーい！」

奥から呼ばれた女性・・・かよ子が応対の為、玄関に向かう。

戻って来たかよ子と来客の話し声。

「いつも助かります。ヴァンプさん。」

「いいのいいの、気にしないで！たくさん作ったほうが美味しいからね、お料理は。」

来客は、おすそ分けを持って現れたヴァンプ將軍。

言動はただの主夫だが、それでも世界征服を企む悪の組織フロシャイムの幹部である。

「まあ、たお前かよ、ヴァンプ。ホント、気軽に来るよなお前は・・・。」

「ちょっとアンタッ！折角おすそ分け持って来てくれたヴァンプさんにまたそんなこと言って！」

「まあまあ、かよ子さん。レッドさんも本気じゃありませんよ。ね？レッドさん。」

「勝手に言ってる！」

この悪態ついてる男性こそ・・・、天体戦士サンレッド。
神奈川県川崎市で日夜、世界征服を企む悪の組織フロシャイムと戦
い続けるヒーローなのだ!!

たとえ働きもせず、彼女のかよ子に養われていると○であっても！
そう！○モであつても！ヒーローなのだ!!

たとえ悪の組織の幹部がおすそ分けに来るほど近所付き合いがあ
ろうとも！ヒーローなのだ!!

かよ子とヴァンプが世間話で盛り上がってからしばらくすると、再
び来客を告げるチャイムが鳴った。

ピンポーン・・・

「あ、今度こそ来たかも！」
嬉しそうに玄関に向かうかよ子。

「何が来たんだよ？」
「？」

一方、訳が判らないレッドとヴァンプ。

しばらくしてかよ子が戻ってきた。しかも満面の笑みで。
ますます訳の判らない二人。

「うふふ、二人とも着いてらっしゃい♪」
「「？」」

かよ子に促され、外に出てきた二人の目の前にあったのは一台の赤
を基調としたレーサータイプのバイクだった。

「お前っ！これっ！どーしたんだよ！？」
動揺するレッド。

それもその筈。

このバイクは以前、金に困ったレッドが中古屋に売りに出したヒーロー用バイクだった。

「アイツら（フロシャイム）相手に必要ねーから。」とはレッドの言葉。

「ふふっ、中古屋さんに出てたから買ったのよ。アンタにプレゼントしたげようと思って。」

「凄いじゃないですか！レッドさん！」

ヴァンプとしては、ヒーローらしく対決に登場したりしてくれるのでは？

と、期待が高まるばかりである。

正直、かなり望みは薄いのだが・・・。

「アンタ、ヒーローなんだから、乗り物のひとつでも持っていないと格好つかないでしょ？」

「そうですよ。ささ！早速乗ってみせてくださいよお。」

「・・・なんでテメエに見せなきゃなんないんだよ・・・。」

「別にいいじゃないの。アンタ、前にヴァンプさんの新品の自転車失くしてるじゃない。お詫びに後ろに乗せてあげてもいいくらいよ？」

かよ子の言うとおりのレッドは以前、ヴァンプの電動式自転車を紛失したことがあるので（翌日に取り戻したが）それを言われると負い目も相まって、強く出れない。

「・・・ちっ、わかったよ！後ろに乗つけてやりゃいいんだろ！乗

っけりゃ!」

本当はかよ子に乗せてやりたかったレッド。

しかし当の本人から言われてしまったのだから、もうヤケクソである。

「おら、来いよヴァンプ!」

レッドとしては慣らし運転も兼ねて借りも返して、さっさと終わらせてしまいたい。

と、気持ちを切り替え、久しぶりのバイクに跨った。

「えゝ、悪いですよゝ。」

口では遠慮してるものの、興味深々のヴァンプ。

「いいから早く来いってんだっ!」

「ひいっ!! すぐ乗りますゝ!!」

慌てて後ろに乗り込むヴァンプ。

「気をつけていってらっしゃい。あんまり危ない運転しちやダメよ?」

「おゝ、わかってるって。じゃ、いってくるわ。」

「いってきます、かよ子さん。」

レッドがバイクを起動させる。

持ち主の所に帰って来た、ヒーロー用のモンスターマシンが喜びを表すかの如く唸りをあげる。

ヴオオオオオオンッ!! オオオンッ!!

颯爽と去っていくレッド達。

「プレゼントしてよかったわ♪あんなに嬉しそうにしちゃって♪」
ご機嫌なかよ子であった。

ギヤオオオオオツツ・・・！！！！

颯爽と風を切る一台のバイク。言うまでも無くレッド達である。
既に法定速度なんて無視である。

「ち、ちよつと、レッドさん！？」

「♪♪♪」

鼻歌交じりで反応がない。ご機嫌である。

「レ、レッドさん！？レッドさん！？」

「♪・・・ちっ、んだよ？ヴァンプ。」

「慣らし運転じゃないんですか！？」

初めてのバイク、初めてのスピードにヴァンプはもう楽しむ余裕な
んがなく、恐怖でいっぱいである。

「スピード出さなきゃ楽しくねえじゃねーかよ。」

そう言いながら更にスピードをあげるレッド。

「ひいひい！！？・・・ん？」

スピード計を見ようと覗き込むと、ハンドル中央にチカチカと点滅
するボタンを見つけたヴァンプ。

「レッドさん、そのスイッチは？点滅してますけど・・・。」

「あん？これか？これは・・・なんだっけ？ま、押してみりゃわ
かるか。」

ポチッ

バイク、そして搭乗しているレッドとヴァンプが赤い光とスパークに包まれ始める。

バチッ・・・！バチバチッ・・・！！

ピカアアアアア！！

「あれ・・・？」

「え？ち、ちよつと！？レッドさん・・・」

そして、一際激しい閃光！

ピカッ！！！！

赤い閃光が収まると・・・

二人の姿は何処にもなかった・・・。

これが運命の始まり。

交わることのなかった二つの世界。

全力を振るえない正義のヒーローと、英雄の遺児。

白き翼が太陽の加護を得た時、運命の歯車が回り始める。

プロローグ（後書き）

投稿が予想よりも遥かに恥ずかしい！！

11／1修正

F i g h t . 0 1 (前書き)

続けて投稿。

作成スピードがあがらない！ o r z

Fight. 01

「う．．．、うゝん．．．。」

倒れていた男性が目を覚ました様だ。

その男性は起き上がるとすぐさま、自身の身体に怪我がないか確認を始める。

背はかなり高く、Tシャツの上からでもはっきりと分かるほど、かなり鍛え上げられている肉体。しかし、彼を見て一番目を引くのは身体ではない。

では何処を見るのか．．．？

それは顔．．．正確には頭部である。

何故なら、特撮番組の正義のヒーローの様な完全に頭部を覆った赤いマスクであった。

彼の名は『天体戦士サンレッド』

正真正銘、正義のヒーローだった。

「ん．．．？」

レッドはすぐ近くにもう一人が倒れているのに気がついた。

「おい．．．、おい、ヴァンプ．．．。」

軽く身体を揺さぶる。

ゆさゆさ．．．

「う、うゝん．．．むにゃむにゃ．．．。」

なかなか起きない。

「起きろっ！埋めるぞ！コラアッ！？」

「ひいっ！？スイマセン！レッドさん！！」

怒鳴り声に、ほぼ反射のみで起き上がる男性。

古代ローマ兵の様な兜、立派な髭、紫のローブという目立つ格好のヴァンプ。

こう見えて、世界征服を企む悪の組織『フロシャイム』の幹部である。

普段は人のいい、カリスマ主夫で、天敵レッドとも（ヴァンプ曰く）
良好的な敵対関係（笑）を築いている。

「さっさと起きねえからだろうが。」

「そ、そんなに怒らないでくださいよ、レッドさん。」

「ちっ・・・、んで？怪我とかはねーのかよ・・・。」

「え・・・と、特にありませんね。」

「そーかよ・・・。」

「あの、それでレッドさん・・・？」

「あん・・・？」

「ここ、どこでしょうか・・・？」

「さーな？こっちが聞きてえよ・・・。」

見渡す限りの木、木、木。

しかも時間は夜。闇夜に三日月が浮かんでいる。

「ちょっと待ってろ。」

「え・・・？」

そう言うと、レッドは神経を集中させ、能力を発動させる。

『レッドイヤー』

ーレッドマスクの機能の一つ。最大半径10kmの物音を聞き分ける能力ー

「・・・ん？・・・これは・・・？」

「何が聞こえたんですか？」

「片方は女・・・？いや、子供か？もう片方は・・・獣か？それかなりデカいな。」

「ええ！？大変じゃないですか！？何落ち着いてるんですか！！その子を助けてあげないと！！」

「んゝ、でもこの音は・・・。」

「早く！正義の味方なんですからっ！！レッドさん！！」

「あーもー！行きゃいいんだろ、行きゃ・・・。」

レッド達の位置から少し離れた場所

レッドが察知した音源を作り出している二つの存在

・・・ギインツ！！・・・キキン！・・・ガッ！！

小さな影と大きな影

小さな影は、月光を思わせるほど煌びやかな金髪、透き通る様な白い肌。

可愛らしく整った顔立ちも相まってアンティークな西洋人形を思わせる10歳頃の少女。

しかし、その端正な顔は現在、苛立ちによって歪んでいる。

「ええいっ！忌々しいっ！」

彼女は焦っていた……。戦闘におけるパートナーと寸断され、孤軍奮闘していたが、魔法を発動させる触媒……。魔法薬も体力も既に底を尽いている。

「こんな雑魚に手こずるとは……。！」
そう言って、肩で息をしながら相対する大きな影を睨む。

「その雑魚に苦戦しとる癖に、デカイ態度の嬢ちゃんやなあ。」
大きい影に月光が照らされる。浮かび上がるのは異形。成人男性を遥かに超える身長、筋骨隆々な巨躯、丸太の様に太い手足。しかし、何よりも異形足らしめているのは、頭部より生えている角と、大きな牙。

一鬼一

太古より闇の住人として存在している者達。
只の人間が抗うことも出来ない屈強な存在である。
そんな存在が目の中の少女に語りかける。

「堪忍やで？ワイかて嬢ちゃんみたいを手にかけるんはイヤなんや。けどな、嬢ちゃんは暴れすぎや。仲間大勢やられてもうて、見逃すつちゅーんは出来んのや。命令もあるしな。……。ホンマ堪忍な？」

そういい、少女の身の丈以上はある棍棒を振りかぶる。

少女は体力の限界でもう動けない。
ならば死を静かに受け入れようと目を閉じた。

ビュオツツ!!

棍棒の風を切る音が迫る。

ズンッ!!

重たい衝撃音。

・
・
・
・
・

・
・

「・・・？」

音はすれども、一向に痛みが来ない。
目を開くとそこには・・・

月光を反射し、闇夜を照らす赤いフルフェイスの男が

横合いから『片手』で棍棒を受け止めている。

「ふう・・・、間一髪ってどこか？」

「「なっ!？」」

新たな乱入者に鬼も少女も驚きの声をあげる。

レッドとしては少女が鬼に襲われているから横槍を入れたただけであ
って、状況とかちんぷんかんぷんである。

とりあえず、デカイ方をぶん殴った。

ズンツツツ!!!!

レッドの拳が鬼の腹に突き刺さった。
「が・・・あっ・・・!？」

鬼が崩れ落ちる。

そしてその巨体が粒子となって消えていく。

ボシユウウウウ・・・

「何だあ？消えちまったぞ、オイ？」

「召喚された鬼は致命傷を与えると、その身は還されるのだ。そんな事も知らんのか？」

レッドが不思議そうにしていると、少女が答えた。

「まあいい、それよりも、見ない顔だが、ジジイの差し金か？」

「あん？ジジイ？誰のことだ？」

「ん？違うのか？」

「ああ、俺達はなんつか、あー・・・、迷子ってやつだ・・・」

「・・・本気で言っているのか？待て、俺『達』？仲間がいるのか？」

「・・・仲間っつか、連れっつか、まああと一人だな。おいヴァンプ！出てきていーぞ!!」

近くから出てきたヴァンプ。レッドからバイクを預かって待機していたのだ。

「はぁーい！もう忘れられてるかと思いましたよー！」

「お前はともかく、バイクを忘れるかよ。」

「ヒ、ヒドイ・・・。」

「で、迷子と言ったが二人ともここがどこか知らんのだな？」

「ああ、さっぱりだ。」

「ワタシ達二人は気がついたらあっちに倒れてたんです。」

「ああ、乗ってたバイクもブツ壊れちまつてるしな……。」

「ふむ……（嘘をついてる様には見えんな……。）」
二人の様子を黙っていた少女が口を開く。

「わかった、この責任者の所まで案内してやろう。どの道ここでは部外者は動きづらいからな、先に会っておいた方が何かと都合がいいからな。」

少女の提案に二人は明るくなる。

「おお、悪いな。助かるわ。」

「でもお嬢ちゃんがこんな時間に一人で出歩くのはどうかと思うんです、ワタシ。」

……ピキッ！

「……ん？どうした？」

固まってしまった少女を不思議そうに見るレッド。

「どうしたの？お嬢ちゃん？」

心配そうに少女に声をかけるヴァンプ。

ぷるぷるぷる……

「……お、おい……？」

「だ、誰が少女かーっ！？」

少女は地団駄を踏みながら言う。

「私は！エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル！！600年を

生きる真祖の吸血鬼！闇の福音！なんだぞ！！」

いきなり怒り始めた少女・・・エヴァンジェリンに少し驚いたレットとヴァンプ。

「お、おお。ほら、謝っとけよヴァンプ！」

「年上だったんですね・・・、無礼な態度で申し訳ありません。」
深々と頭を下げるヴァンプ。

「フ、フン！わかればいいんだ！わかれば！」

すんなり謝罪されるとは思ってなかったエヴァンジェリンの方が面食らう。

「あゝ、それじゃあエヴァンジェリン？そろそろ案内してくれねえか？」

「あ、ああ、そうだったな。すこし待て。こっちの連れとも合流したい。」

そういつて念話で己の従者に語りかける。

『茶々丸、聞こえるか茶々丸？』

数分もしないうちにエヴァンジェリンの連れがやって来た。

・・・空から。

ドドドドドド・・・！！

緑色の髪をした女の子が、足からジェット噴射しながら降りてきた。

F i g h t. 0 1 (後書き)

これより先は、マイペースに投稿していく予定です。

1 1 / 1 修正

F i g h t. 02 (前書き)

こんな駄文をお気に入り登録していただけたらとは！

感謝感激です！

がんばって週一以上のペースでがんばりたいと思います！

それでは、どうぞ！

F i g h t . 0 2

眩い光に包まれた二人の行き着いた先は、生い茂る森。

現れたのは大きな異形―鬼―

鬼に襲われている少女を助けたレッド。

この少女との出会いが物語を動かし始める。

― F i g h t . 0 2 ―

「ご無事ですか！？マスター！」

空からやってきた緑色の髪をした少女が己が主の元に駆け寄る。

「うむ、問題ない。お前こそ大丈夫だったか？」

「はい、損傷率2%以下。問題ありません。」

「そうか、・・・ん？どうした？呆けた顔をしておって。」

エヴァンジェリンが呆然としてるレッドとヴァンプに声をかける。

「紹介しよう、我が従者の茶々丸だ。」

「初めまして、絡繰 茶々丸と申します。以後お見知りおきを。」

丁寧にお辞儀をする茶々丸。

「これはこれはご丁寧に。ワタシはヴァンプといいます。」

「・・・レッドだ。」

「さて、レッドにヴァンプよ。そろそろジジイの元へ行こうではないか。先ほどの礼だ、案内してやろう。光栄に思うがいい。」

「へーへー……。まあ、頼むわ。右も左もわかんねーからな。」

四人（三人と一体？）と一台は夜の森を歩く。

今までの経緯をヴァンプが茶々丸に説明し終えた所で雑談し始めた。

「へー、じゃあ茶々丸さんはロボットなの？」

「はい、ヴァンプ様。」

「うふふ、様なんて付けなくていいよ。」

「了解しました。ではヴァンプさんと。先ほどの問いですが、私はロボット・・・女性型ですのでガイノイドです。」

「へえー、すごいですねえ、レッドさん。」

「ふっ、そうだな、お前の所のプラモデルロボとは比べられねえな？」

「もー！またそうやって意地悪なことを言うんだからー！」

そうこうしてる内に森を抜ける。

眼前に広がるヨーロッパ調の街並みに、二人は呆然となる。

「・・・日本じゃねーのか？」

「どどどどうしましょうレッドさん！ワタシ！パスポートとか持ってませんよ！逮捕とかされちゃうんでしょか！？」

「・・・俺だって持ってねえよ！」

「困ります、ワタシー！」

そんな二人を怪訝な表情で見るエヴァンジェリン。

「オイ、本気で言っているのか？ここ、麻帆良は日本だろうが。それも国内最大級の学園都市として有名だろうが。麻帆良という名前位聞いたことがあるだろう？」

「……は？麻帆良……？」

二人は間の抜けた声をあげる。

「……フム、茶々丸。」

「ハイ、ここ麻帆良学園は明治中期に創設され、初等部、中等部、高等部、大学部や研究施設などの学術機関の総称です。一帯には各学校が複数ずつ存在し、敷地面積はとても広大です。また、学生寮や神社や商店街などの都市機能も併せ持っており、学術機関と併せて麻帆良学園都市と呼ばれています。各分野にて様々な功績を挙げている機関も多いので麻帆良という名前を一度は耳にしたことがあると思うのですが……。」

「……聞いたことあるか？ヴァンプ。」

「いいえ、それにウチの埼玉支部の知り合いからも聞いたことはありません……。」

「……。」

沈黙する二人。

先頭を歩いていたエヴァンジェリンが振り返って沈黙を破る。

「まあいい、その辺の議論は後だ。着いたぞ。」

エヴァンジェリンの背後には巨大な建物。どうやら校舎の様だ。バイクを脇に停め、中に入る一行。

「ここだ。」

一際大きな扉の前で止まる一行。学園長室と書かれている。

その大きな扉を遠慮なく蹴破るエヴァンジェリン。

ドバーーン！！

「ひょっ!？」

中から響く老人の声。

「オイ! ジジィ! 身元不明者二名、連れてきてやったぞ!!」

「身元不明って・・・。」

「・・・まあ、怪しいわな・・・。」

呻きながらも入室するヴァンプとレッド。そして茶々丸。

「もう少し静かに入ってくれんかのう・・・」

「なぜ私がジジィを気遣わねばなんのだ!」

エヴァンジェリンと話しているのは、異様に後頭部が長い老人であった。

老人は入室してきた三人に気がつく、自分の椅子に深く腰かけ直した。

「では、客人方に改めて自己紹介しようかの。ワシが、この麻帆良学園及び関東魔法協会理事会の長をやっておる、近衛 近右衛門と申す。」

「まあ! これはこれは、ワタシはヴァンプと申します。」

「・・・レッドだ。」

「もう! レッドさんっ! またそんなぶっきらぼうに! だからよく誤解されるっかよ子さん心配してましたよ!」

「うるせえよ! お前にゃ関係ねえだろーが!」

ギャーギャー言い争い始めた二人。

「あー・・・、そろそろいいかの?」

学園長が割って入る。

「・・・っと、悪いなじいさん。」

バツの悪そうなレッド。

「ほっほっ、構わんよ。では単刀直入に訊こう。主らは何用でこの麻帆良に参った？」

先ほどまでの飄々とした雰囲気は既に無い。

老いてなお、関東及び学園最強の魔法使いが放つ殺気が部屋を覆っていた。

返答次第では・・・、そう告げるかの如くの重圧。

しかし、その重圧を真正面から受けていながら平然な調子で言いにくそうにレッドが告げる。

「わかんねえんだよ、マジで・・・。」

「・・・は？」

部屋を覆う重圧が霧散する。

「ほ、本当かね・・・？」

場がなんとも言えない空気になってしまい、困った様子の学園長。

そこに、今までだんまりを決め込んでいたエヴァンジェリンが割って入る。

「嘘はついてないだろう。こいつ等はそもそも麻帆良自体を知らない様だ。」

「ふむ、二人が麻帆良に来た時のことを詳しく教えてくれんかの？」
学園長は判断材料を少しでも増やす為にレッドに更なる説明を求める。

「ああ・・・。」

そう言ってレッドは事の経緯を話し始める。

神奈川県川崎にて、久方ぶりにバイクに乗ったこと。仕方なく二人乗りしたこと。

かなりのスピードを出していた際に点滅していた用途不明なボタンを押したこと。

ボタンを押した途端、眩い光に包まれて気がついたら、ここの森に二人で倒れてたこと。

「んで、途方に暮れてたところで何か物騒な音が聞こえてきてよ。その場所に向かったんだ。

そしたらそのエヴァンジェリンがよ、でけえ鬼？みてえなのに襲われてたからよお、助けたんだ。」

「ふむふむ、なるほどのう……。」

話を吟味する学園長。

「ジジィ。」

「ほ？」

熟考している学園長に話しかけるエヴァンジェリン。

「ジジィ、こいつ等に危険はないさ。」

「何故じゃ？」

「こいつ等はここが麻帆良であるという事も、麻帆良がどういう土地なのか、どんな物があるかもわかつちやいない。そんな間抜けな侵入者など聞いたこともないだろう？」

「ふむ……。」

しかし学園長とて、組織の長。はいそーですか、とはいかないものである。

「ここからは、私の推論だ。確証もないがいいか？」

「ふむ、聞こうかの。」

「こいつ等について、不可解な点が三つある。」

そう言いながらエヴァンジェリンは人差し指を突き立てる。

「一つ、ここに来るまでに聞いた、こいつ等の周りの環境・常識。600年を生きた私でさえ聞いたことがないことばかりだった。」
エヴァンジェリンは続ける。

二人がいる世界は、まるでTVの様な平和を守るヒーローと怪人の構図、世界に存在する数々のヒーローと悪の組織、ヒーローと怪人が当たり前に生活する世界。

「二つ、こいつ・・・レッドは相当強い。それこそこの私ですら底が見えんほどに。表だろうが裏世界だろうが、ここまで腕の立つ男が、このナリで全くの無名というのがありえん。」

茶々丸が主の言葉を補足するべく言葉を続ける。

「話の中で出てきた組織名、人物、お二人様ご本人の情報を検索した結果、通常のネット及びまほネット

での検索結果は0件でした。」

「三つ、おそらく事の発端であろうこいつ等の持ってきたバイク。

魔力でも気でもない気でもない、未知の『力』の残滓を感じた。あのバイクにある何かしらの装置が作動したのは間違いないだろう。」

「軽くスキャンしてみました、バイク自体はほとんど異常がみられませんでした。ただし一箇所、大破している装置を発見しました。全体的に魔法技術が使われていないだろうと思われれます。破損状態からみて、装置の起動は不可能かと思われれます。」

「以上から私は、こいつ等が所謂異世界又は平行世界から来たと推測する。」

「ふむ・・・、異世界のう・・・。」

学園長は推論を聞き終え、椅子に深く座り直して考える。

そして、再び口を開く。

「ワシからいくつか質問をしたい。いいかの？」
うなずく二人。

「まず、本当にここにきた原因は判らんのじゃな？」

「・・・ああ。」

「はい・・・。」

落ち込み気味の二人。

「そのバイクの修理は出来るのかの？」

「具合見てねえからナンとも言えねえが、難しいんじゃないか？」

「腕つぶしに自信はあるんじゃない？」

「まあな。」

「レッドさんは本当に凄く強いんですよ。」

「その力、弱きものに向けるか？」

今までで一番鋭い眼光の学園長。

「しねーよ。俺はヒーローだぜ？」

「そうですよ！レッドさんはそんなことしませんよ！
プンプン！と怒るヴァンプ。

「最後に、衣食住とバイクの修理、当てはあるかの？」

「・・・どっちもねえなあ。」

「どうでしょう・・・。」

わずかな沈黙。

「・・・あい、わかった！どうじゃろう、バイクの修理が出来るまでここで働いてみんか？勿論、衣食住とバイクの修理が出来そうな者も紹介しよう。どうじゃ？」

「そりゃ有難てえけどよ。」

「ええ、本当に！」

学園長の提案に喜びを隠せない二人。

「今すぐ用意できる仕事は、警備員と指導員じゃ。これには相応の腕っぷしが必要じゃから、レッド殿向けじゃのう。ヴァンプ殿は何か得意な物はあるかの？」

「そうですね、お料理かな？」

「コイツ、料理だけはスゲェんだよ。（しかし、悪の幹部が一番最初に思いつく特技が料理って・・・。）」

「ほっほっほ、ならば店でも開いてみますかな？ヴァンプ殿。」

「ええ！？ほ、ほんとに！？」

「お、いーじゃねーか。ヴァンプ、やってみろよ」

驚くヴァンプに、はやし立てるレッド。

「い、いいんですか？実は少しやってみたかったんです。」

「ほっほっほ、では、明日までに必要な書類や手はずを整えておくでの。悪いんじゃが、昼前にもう一度ここに来てもらえるかの。ヴァンプ殿、悪いんじゃが明日の昼食をテストとさせてもらうでの。機材や食材はこちらで用意するので、心の準備はしておくようにの？」

「は、はいいゝ！」

やや緊張するヴァンプ。

「では最後に、今晚二人が泊まる所じゃが・・・」

「おい、ジジイ。」

黙っていたエヴァンジェリンが口を開く。

「今晚は我が家で預かってやろう。」

「ほ？どういう風の吹き回しじゃ？」

「フン・・・、ジジイには関係ないことだ。話が終わったなら、もう連れていくぞ？」

「うむ、今日はもういいじゃろ。」

「ジャマしたなジジイ。行くぞ二人とも。」

ソファから身を起こし、部屋の出口に向かうエヴァンジェリン。

「それでは失礼します、学園長。」

主の後を追う茶々丸。

「お邪魔しました。また明日。」

お辞儀して退出するヴァンプ。

「じゃーな。」

手をひらひらさせながら退出するレッド。

こうして四人は、この地の最高権力者の部屋を後にした。

突然の来客がいなくなり、静寂が訪れた室内。

「ふむ……、異世界からの来訪者……のう。」

そう言い、机の引き出しから一枚の札を取り出す。

「悪いのう、エヴァや……。」

そして太陽はこの地、麻帆良を照らし始める。

F i g h t . 0 2 (後書き)

誤字脱字等ありましたら、ご指摘下さいませ！

2011／11／1修正

F i g h t . 0 3 (前書き)

こんな小説に2,600アクセス& a m p ; 600PVも！

感謝です！皆さんに言いたい！ありがとう！そして、ありがとう！

これからもがんばっていきますよー！！

F i g h t . 0 3

森で助けた少女、エヴァンジェリンと茶々丸。

二人の案内でこの地、麻帆良の最高責任者と出会うレッドとヴァンプ。

学園長の提案により、レッドは警備員兼指導員、ヴァンプは料理屋をやることに。

今日の宿を提供するというエヴァ。

一行はエヴァの家に向かうこととなった。

— F i g h t . 0 3 —

学園長室を出た四人はそのまま学校も後にする。

レッドとヴァンプの足取りは軽い。

少なくとも当面の生活の不安が解消されそうだからだ。

そして今晚お世話になるエヴァンジェリン宅に向かう四人と一台。

「しかしよお、エヴァンジェリン。いいのか？世話になって。そりやまあ有難てえけどよお。」

「エヴァだ・・・。」

眩くように言うエヴァンジェリン。

「あん・・・？」

声が小さくて聞きなおすレッド。

「っっ！エヴァでいいと言ったんだ！」

「お、おう・・・。」

怒鳴りちらすエヴァに、若干引き気味のレッド。

「光栄に思うんだな！フンッ！」

顔を赤くしてそっぽを向くエヴァ。

「照れ隠しされている所、申し訳ありませんマスター。」

「っ！誰が照れているだと！ええい！このボケロボ！巻いてやる！」

「あああ、いけませんっ！？マスター！そんな乱暴に巻かれてはっ・・・！」

どこからか取り出したゼンマイを茶々丸の頭に突き刺し、グリグリ回すエヴァ。

いきなりの展開についていけず、啞然とするレッドとヴァンプ。

しばらくして落ち着いたエヴァと茶々丸。

「で？一体何の話だ？茶々丸よ。」

「ハイ、レッドさんのバイクのことで提案があるのですが。」

「ふむ？言ってみろ。」

「はい、超に相談してみるのは如何かと思ひまして。」

「・・・なるほど、いい案だな。明日にでも連絡を入れておけ。」

「了解です、マスター。」

トントン拍子に話を進めるエヴァ達。

「オイ、その超ってのは誰なんだ？流石に信用出来ねえヤツには触らせたくねえぞ？」

そこに割って入るレッド。

「ああ、まあ信用出来るんじゃないか？」

「はい、超は私の製造者です。他所よりも圧倒的に技術レベルの高い麻帆良においても更に高い技術力を持っており、『麻帆良の最強頭脳』と呼ばれています。」

「なんだか凄そうですねえ。その人なら直してくれるかもしれませんね！」

そうこうしている間に、森の中の少し開けた所に出た四人。そこには二階建ての立派なログハウスがあった。

「着いたぞ、これが我が家だ。」
そういつて家の中に入っていくエヴァ。

ログハウスを見上げているヴァンプと、邪魔にならないよう隅にバイクを停めるレッド。

玄関を見ると茶々丸が客人二人を待っている。

「ようこそおいで下さいました。中へどうぞ。」

中に入るように促される二人。

「夜分遅くに失礼します。」

「邪魔するぜ。」

レッドとヴァンプが中に入って目に入ってきたのは、いたる所に置かれたアンティーク人形。

見渡す限りの人形、人形、人形。

大勢の人形を呆然と眺めている二人に茶々丸が声をかける。

「お茶の用意が整うまで、少々お待ちくださいませ。」

ぺこりとお辞儀をし、準備の為に台所に引っ込む茶々丸。

「あ、お構いなく。」

気を遣うヴァンプ。周りを再度を見回してレッドに話かける。

「しかし・・・、凄い数のお人形さんですね、レッドさん。」

「おお、どれもこれも凄え凝ってんなあ・・・。ん？」

そう言いつつ、一体の人形に目を惹かれるレッド。

他のフリルドレスなどの豪華な見た目の人形と違い、黒のワンピースにカチューシャとシンプルな格好。

背中には可愛い小悪魔みたいな小さな羽根がついている。顔はどことなく茶々丸を幼くした様な顔立ち。この人形だけ、他のとは存在感が違うと感じたレッドは人形を手にとってみる。

「何ジロジロ見テンダ？ 斬り刻マレテノカ？」

人形が喋った。

しかもとんでもなく物騒なことを言い放った。
普通なら絶叫物だが・・・。

「あん？ やれんのか？」

しかしレッドは何でも無いように言い返す。

「ええ・・・。」

横で見ていたヴァンプも呆れてしまう。

「ケケケ、イイ反応スルジャーネーカ。 気ニ入ッタゼ、赤イノ！」

「オメーもいい殺気飛ばすじゃねーか、緑の。」

物騒な友情を結んでいる一人と一体に、呆然とするヴァンプの後ろから茶々丸が声をかける。

「お待たせしました。 お茶が入りましたので、どうぞこちらへ。」

リビングのテーブルに促されて、席につく二人。

「オイ、妹ヨ。 オレモソツチニヤツテクレヨ。」

「はい、姉さん。」

「ワリーナ。」

そう言い、喋る人形をテーブルに備え付けてある小さな椅子に座らせる。 どうやら定位置の様だ。

「その小さなお人形さんが、茶々丸さんのお姉さんなんですか？」

と不思議そうに尋ねるヴァンプ。

「ええ、マスターの初代従者のチャチャゼロ姉さんです。姉さん、こちらはレッドさんにヴァンプさん。故あって、今晚お泊めすることになりました。」

洗練された動作でお茶をカップに注ぎながら答える茶々丸。

「オウ、チャチャゼロダ！ヨロシクナ！」

「はい、よろしく。」

「・・・おい、オメーは自分で動けねえのか？」

「はい。姉さんは今、とある事情で自力による活動は出来ません。」

「ふーん・・・。」

「忌々しい呪いのせいだな。」

背後からした声にレッドとヴァンプが振り返ると、階段から着替えを済ましたエヴァが降りてきた。

「チャチャゼロは私の魔力で動くんだが、今の私は魔力を封印されていてな。そのせいで自由に動けないのさ。」

思い出してイライラしたのか、やや乱暴に椅子に座るエヴァ。

黙って主にお茶を差し出す茶々丸。

そのお茶を優雅に口に運ぶエヴァ。その所作は非常に美しく、一枚の絵画の様だ。

「シカシ、アノ御主人が他人ヲ泊メルトハナ。気ニ入ツタノカ？」

「ぶう~~~~っっっ!？」

・・・訂正。お茶と共に、漂っていた優雅さが木っ端微塵に吹き飛んだ。

「ゲホッ！ゲホッ!？・・・何を言う！チャチャゼロ!？」

咽るエヴァに黙ってタオルを差し出す茶々丸。メイドの鑑である。

「ダッテヨ？他人ヲ泊メルナンテ初メテノコトダシナ。」

「っ！？か、借りを返したただけだ！深い意味はない！！」

ギャーギャー騒ぐ主従を他所に、お茶談義するヴァンプと茶々丸。我関せず、と黙々とお茶を飲むレッド。

窓の外を見ていたレッドが立ち上がる。何か無いかとポケットに手を入れると、出てきたのはパチンコ玉。転移前に行っていたパチンコ店のものである。

・・・ガラッ。

急に窓を開けたレッドに全員が注目する。

「・・・気に食わねえな。こういうのはよ・・・。」

手にしていたパチンコ玉を・・・

チュインッ！

親指で弾き飛ばす。

指弾である。

結果も確認せず、窓を閉めて席に戻るレッド。

「おい、レッド。先刻のは一体、何を撃った？」
興味深々に聞いてくるエヴァ。

「あん？何って・・・、学校からここまでずっと後を着いて来てた何かだよ。道中迷わないようにとかで監視してんなら別に構わねえが、ずっと家の中まで監視してやがったからな。気に食わねえからよ、警告の意味も含めて威嚇しただけだ・・・。」

「・・・・・・・・。」

エヴァは驚愕した。

自分も気づかなかった、監視の目をいともたやすく看破したこと。そして、察知からの迅速な対応に。

恐らくその監視はジジィによるものだろう。ならば自分が気づけない様な監視を用意することも出来ただろう。だが、レッドは気づいた。その事実にとっても興味が湧いてきた。コイツはどれほど強いのだろう・・・と。

一方、レッドは急に黙り込んだエヴァを見て、不安を覚える。

「・・・・・・・・マズかったか？」

「そうですね！レッドさん！いきなり暴力はマズいですよー！！」
ヴァンプの正論に更に焦るレッド。

「・・・・・・・・おい？エヴァ？」

「・・・・・・・・ふふふ、面白い・・・・・・・・。」

小さく呟くエヴァ。

「あん？おい、エヴァ・・・？」

「茶々丸！別荘を用意しろ！！コイツの強さに興味が湧いた！」

「Yes、マスター。」

そう言い、地下へ消える茶々丸。

「オホ！楽シソウジャーカ、御主人。オレモマゼロヨ！」

「くくく、いいだろう。レッド！ヴァンプ！ついてこい！面白い物

を見せてやろう！」

「「？」」

急にテンション上げっぱなしのエヴァに置いてかれてる二人。

一行は家の地下室に降り立った。

そこには大きなガラス球を設置している茶々丸の姿があった。

「準備出来ました、マスター。」

「うむ、ご苦労。」

大きなガラス球を覗き込むレッド達。その中にはお城と海が見える。

「なんだ？ 模型？ ジオラマか？」

「凝ってて凄い綺麗ですね〜！」

「おい、二人とも。この円の中に立て。」

言われるままにガラス球の正面の魔法陣の中に立つ二人。

そこにエヴァ、チャチャゼロを抱いた茶々丸が加わり、エヴァがガラス球のボタンを押す。

ポチッ

「ククク・・・、存分に驚くがいい！」

足元に魔法陣が輝き、眩い光が溢れる。

・・・カッ！！

光が収まると・・・

レッドとヴァンプの眼前には、大きく立派な城と南国の海が広がっ

て
いた。

F i g h t . 0 3 (後書き)

感想・ご指摘・ご提案、お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0215y/>

ネギま！太陽の戦士

2011年11月5日18時08分発行